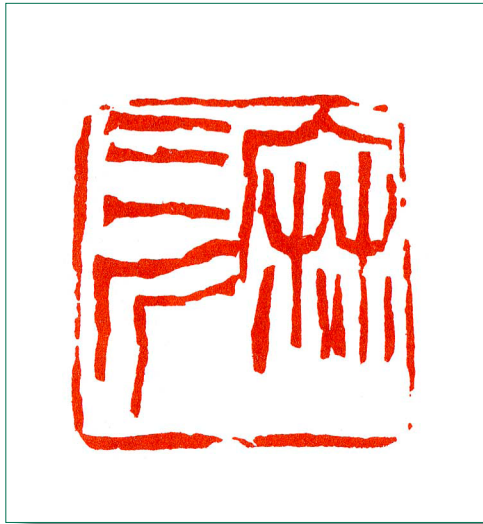


あを

9
2010



額紫陽花



麻三斤 保多孝三著『柞廬印存』(八) より

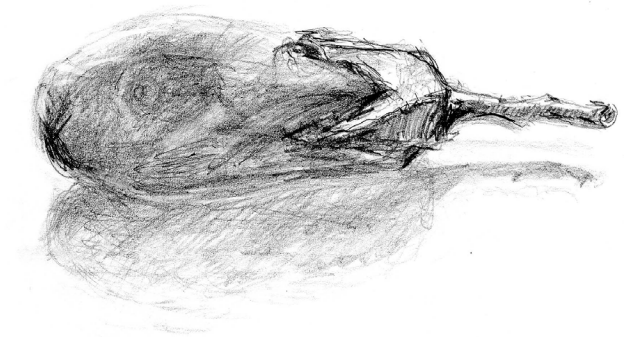
麻三斤 「まさんぎん」と読む、さうです。『碧巖録』などの公案集に

洞山が庫裡で麻の目方を量っていたとき、僧が「如何なるか是れ仏」と問うたのに対して、洞山は「麻三斤」と答えた。

といふ。正に禅問答、解らうとすると余計解らなくなるやうな気がする。公案は俳句の二物のとりあはせにもどこか似通うてをり学ぶべきところがある。『柞廬印存』は八冊から成りその最終巻の終りから二つ目に置かれてゐる。

あそ

九月



水中花

山法師雨近ければいよよ白
片陰を頭ひよこひよこしてをりぬ
しろかねとくがねみづかね蓮の葉
ひもすがら外をみてゐる水中花
アパートの窓にあるのは南瓜畠

本町三 佐藤喜孝

○

おちてなほ酸っぱいままの夏蜜柑
みんなを聞きつつミシン踏みつけ
何時のほど増える団扇を捨てきれず
切りつめし金柑の木に白き花
古浴衣裂いて草履となりにつけり

所 沢 須賀敏子

逗子行

屋暗き羽抜孔雀のまへ通る
初夏や鳶の羽のさしわたし
石伏せて沈没船という作品
藤棚に下がる莢豆うすみどり
年古りし松屈強な芯の立つ

浦和 竹内弘子

河鹿笛

杏ジャム煮てをり雨だれ弾みをり
園丁とモネの話を梅雨晴間
浅草の友病みてゐる祭かな
遠浅の海満ちてくる月見草
甲斐駒に夕日は入りぬ河鹿笛

田端 田中藤穂

○

御柱深山の神の大樹なり
諏訪祭「こいよ」が遺言とはなれり
目まぐるし水飛礫せる乙女滝
天の色めでたし泰山木の花
青嶺より白雲どんと湧きあがる

三光坂 東亜未

清し

青紫蘇を刻む厨の清しさに
手早さの衰へ一日辣蕪漬け
惚けゐて活氣の欲しき新生姜
清しさと不思議をかもし滴れり
初蟬ややつと湿度は七十に

富田 長崎桂子

大 暑

大 宮 早崎泰江

とろとろと浅き眠りに遠郭公
こころなし首傾げをり子かまきり
空蟬を見上げるやうに落ちし蟬
炎昼やなりをひそめる鴉どち
災害と云ふ人のありこの大暑

○

河 田 町 堀内 一郎

梅雨明けや妻には妻の旅支度
神は何かと問はれて黙す土用丑
故郷のない噴水が上下する
線香花火むかしの闇はむらさきに
冷房のさむいくらひに老いけらし

○

中 井 森山のりこ

ゆらゆらと優雅に泳ぐ天使魚
とりどりの色泳がせて梅雨館
しばらくは我も魚群に梅雨館
束の間の花火に願ひ掛けてみる
大花火消えて川面の揺れもどる

柚 の 花

落 合 森 理和

柚の花白煙戻す玉手箱
齒応への胡瓜ぼりぼり投票日
竜神や窓を消し去る朝の霧
緑さす妊婦二才兒子犬連れ
思ひ出の扉の外は雲の峰

○

住替の身辺軽ろし柚子の花
身の丈の暮しのふたり釣忍
蛞蝓の螺旋描きて銀ひかる
紫陽花はドライフラワーとなりにけり
朝顔にさざ波染まり川の町

東浦和 山莊慶子

台湾

弓なりの瑠璃の薨や雲の峰
西日受くブーゲンビリア刈り込まれ
衛兵の人形のごと片陰に
夏の雲飛行機のごと総統府
夜を知らず出店無数に夏闌ける

本町三丁目 吉成美代子

○

羊水をおよぎきつたる夏の朝
近道の行く手ゆくてにしじみ蝶
しゃぼん玉蝶のかんばせ撫づるかな
夏近しゼリーのやうな日を過ごし
まあいいか大吟醸で煮る鰯

鍋屋横丁 吉弘恭子

胡麻の花

梅酒瓶廻して揺する夏の夜ぞ
祖母の墓激しき露に己が身を
胡麻の花祖母のいのちの咲き還る
鍬洗ふ瀬に闇垂れて螢飛ぶ
田螺田に百体の雲水底に

鹿 袋 渡邊友七

○

梅雨明けてベランダを占むキティとプー
四面道の渋滞を越ゆ紋白蝶
しやりしやりの対馬の西瓜ふと思ふ
昼寝覚む蹠のほてり消えぬまま
サザンの桑田聞く美容院晩夏

清瀬 赤座典子

○

鉢づたひ大きな黒い揚羽蝶
人込の中に気になる夏帽子
空蟬の八ツ手の葉裏かくれんぼ
蒸茄子に甘味噌少し箸やすめ
朗読の個人レッスン扇風機

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

○

秀でたる一芸持ちて心太
相聞に夕暮間近な酔芙蓉
夏の蝶大きな羽根を自墮落に
父の日や蠟燭立の鉄の針
無器用に生きて器用にビール飲む

曳舟 遠藤 実

○

夏負けを言ふ人にあり底力
鬼灯市肩車して親の顔
はらからの顔の揃ひし夏館
西瓜抱いて客待つ家に急ぎけり
水中花生れつゝあり玻璃の中

逗子 鎌倉喜久恵

総持寺

川崎・小田栄

木村茂登子

一夜禅終る猛暑のきざす朝
三門の仁王の渴く大暑かな
空蟬の考へる人のごと幹に
送火の日が誕生日誰が縁
コマーシャル猫吾輩もサングラス

日光・鬼怒川

京

橋

篠田純子

夕かなかな大杉なほも湿りたる
湯の里の瀬音をしのぐ河鹿笛
溝に急く白雨ににほひありにけり
夾竹桃三度三度をいただいて
足湯してアイスクリーム道の駅

○

千駄木

芝尚子

甘いとは言へどやっぱり夏蜜柑
変りゆく巷に聞ゆ祭笛
夏衣この世斜めに見て過ぐす
蠅叩柱に下げて古りにけり
大き虫くはへ思案の雀の子

○

宝仙寺前

芝宮須磨子

大声に時を託して酷暑かな
蜩蛄のあとずさりして裸足の子
夏日中堰の水辺に虫集ふ
水辺亭句会の果ての氷あずき
父のことあれこれ思ふ氷水

青 芒

つるぎ
ひたし
で
劔地東出

定梶じよう

梅雨の小川注ぐ川にも名前なし
優曇華や沖に台船赤錆て
出水禍の夕焼みんなさびしめる
ポケットのない服を着て青芒
雷雨過ぎたる木天蓼の葉群らかな



近世俳諧と漢詩文

参拾四

王 岩

僧の門こちら敲く蓮見かな

柳 居

柳居、本名は佐久間長利。貞享三年（一六八六）～延享五年（一七四八）。別号に眠柳居や落霞窓や織月窓や春日庵などがある。『柳居発句集』がある。

賈島の五言律詩「題李疑幽居（李疑が幽居に題す）」の頷聯

鳥宿池中樹、

鳥は宿る 池中の樹

僧敲月下門。

僧は敲く 月下の門

を逆手に取った。賈島が言う「僧は敲く月下の門」を、柳居は蓮の花を見るために、こちらから僧の門を敲くと表現した。

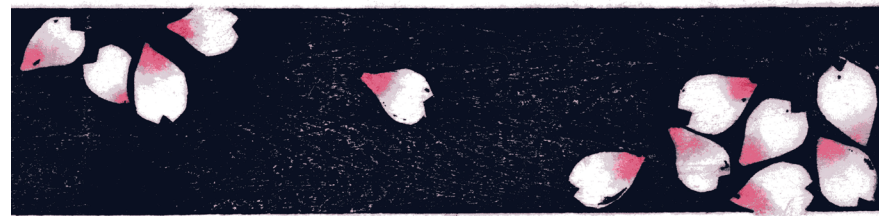
前月作品

鍋葉缶瓦斯台磨く心太	森理和
木の吐息花の喘ぎや樺の忌	吉弘恭子
鳴く蛙街中にふと一枚田	渡邊友七
短夜や指で繰るもの玩具めく	赤座典子
出かかった言葉飲みこむ心太	安部里子
軽く云ふ癌の告知や座禅草	遠藤実
芒挿すはやぶさの飛ぶ宙に向け	鎌倉喜久恵
片蔭へとをぢさん顔の盲導犬	木村茂登子
同居して子は遠くなり額の花	斉藤裕子
小節まはす老鶯自身酔ひたるや	篠田純子
筍を只ころがして直売所	芝尚子
自販機にふるさとの水街暑し	芝宮須磨子

喜孝 抄

一人一句

山百合のがうと開きし向う脛	佐藤喜孝
弟よ天を蔽ひてあとりに来る	定梶じょう
父母のこと姉しか知らず豆の飯	須賀敏子
アトリエに青田の匂ひ満ちてをり	鈴木多枝子
チヨットコイとは小うるさき春の鳥	竹内弘子
兜虫角もつものは闘へり	田中藤穂
天の川見てゐるわたし星の中	續木文子
新緑や庭の蓋付ドラム缶	東亜未
水捨てる子子のとびはね足掻く	長崎桂子
竹箒新しくせり夏落葉	早崎泰江
空ろな世噴水しかと天を指す	堀内一郎
留守の間に紫陽花の色変りけり	森山のりこ



七月作品より

吉弘恭子

空調音はブゼラの音 梅雨曇

佐藤 喜孝

南アフリカの楽器ブゼラ、ワールドカップではあまりのうるさにサッカーに集中してみていられない場面もあった。夜中の試合は音を消して見ていた。気持を高揚させるには民族楽器はかせない。云われてみれば使っている間ずっと同じ間隔で空調の音は出ている。さぞや梅雨曇のような心持でテレビ観戦をしていたのだろうと想像がつく。慣れればと云うが、決勝戦が終わるまでとうとううるさかったという記憶しか残らなかった。感情が季語によって増幅されて面白い。

吹雪く中動かぬものに畦の杭

定梶 じょう

子供の頃新潟市に住んでいた。冬になると青空は全くない。それこそ吹雪になると人の通りもなくなってしまう。動かないものは杭と言っている。杭を動かすのは人間、杭も動かないのだから人も動かない。表に出ていない人の動きも見えて日本海側の冬の厳しさを

思い出した。感情の秘められた良い作品になった。

梅雨深し息子と名のる電話有り

須賀 敏子

世間でオレオレ詐欺が騒がれてからだいぶたった。「息子と名のる」と詠まれているので息子さんでないことは解る。この句も又感情が表出されていない。私も二回同じようなことがあった。自分の息子の声は覚えていたつもりでも何故かどきどきしてしまった。じょう俳句と同じように読手に思いをゆだねている。面白い句になった。

むらさきの雨のそぼ降る桐の花

續木 文子

先月号から「あを」に参加された作者の誌面で発表する初めての作品である。桐の花の淡紫色の花びらが散る様を「雨のそぼ降る」と表現された。なかなかうまい表現になった。どんどん吟行にも参加され同じ場所で作る他の人の俳句をみて頑張っしてほしい

目が開けられぬ父の日の眼鏡かな

堀内 一郎

父の日は私にとっても用がなくなっていました。六月は祭日がないので父の日も又良い曜日となっている。眼鏡をどこかに置忘れたのであろうか。眼鏡をかけるにいと物がよく見えないので、目を開けていないのと同じ。とも詠めるし、わざわざ父の日と限定しているので父の日のプレゼントに胸がいっぱいになり目頭が熱くなった。眼鏡の奥で。とも、穏やかな気持ちになった。

病む胸に蝶は言葉のごと降り

渡邊 友七

胸の病気でなかなか外出もままならないとお聞きしている。早いご回復をお祈りしています。言葉は相手があつてうまれるもの。縁側でもお休みになつていらしたのであろうか。ちようちようがあつちとこつちにいききしている様が、会話をしているように思われたのだろう。蝶々も優しい言葉をかけてくれたに違いない。

同居して子は遠くなり額の花

斉藤 裕子

末席にやすらぎてをり葛ざくら

芝 尚子

お茶の先生の尚子さん、いつも座られるのは主人の席か正客の席であろう。お茶事のことは皆目分らない。高校生の時卒業間際に一通り教わった。頭の中にはのみ方だけが残っている。今日は末席でくつろいでいられる。末席の作法も確かあったように記憶している。葛桜の季語で心持が伝わってくる。季語とはいいいいものです。



019 019
2014-04-04

神田川源流

吉弘恭子

川流る 鯀のやうな夏落葉
糸とんぼ澄みてひびきし鳥のこゑ
夏の石ゆらして渡る小川かな
源流に木の影とんぼ蝶のかけ

夏草や露のしめりをのこしけり
水の面さやさや通ふ夏の風
とんぼうが犬のしつぽに触れてとぶ
夏草にかくれてしまふ紋白蝶
雨のやうあめんぼ水面ゆれやまず
昼下り御所水引の早も立つ

あをかき集

竹内弘子選



腰窓にへばりつきたる鼯馬

吉弘 恭子

蜘蛛の囀の宙へとびだす容して

江戸櫻図師のまなこを見て話す

おさな児の口にこぶしや新樹光

忘れぬマッকারサーのサングラス

遠藤 実

ごきぶりの目をしてごきぶり殺しけり

水平線はみ出している天の川

嫌いです政治の話と金魚玉

炎天に溶けて見えない筑波山

佐藤 喜孝

炎天へ室内犬の声もるる

炎天を電信柱登る蔓

屋上に炎天がある百貨店

日焼止たつぷり塗って日に焼けて

芝 尚子

青信号押へてわたる夏帽子

杖持ちて炎天の中いざ齒科に

帰りきてかなぐり捨てし極暑かな

凌霄の花のこぼれの夥し

赤座 典子

苦瓜の雌花少なし風抜ける

梅雨明けや散歩の犬の舌ながし
ボート漕ぐ池にブラックバスの影
木下闇玉川上水覗きけり
神田川犬も交じりて水遊び

須賀 敏子

夏に負け小鳥のやうに啄みて
花生けに挿す小風鈴子の見舞
訪ふてみたき家あり百日紅
線香花火持つ手思ひつきり伸ばし
向日葵の迷路右往左往してる声
悪ぶってみても気弱なサングラス
遠吠や父の日ただに深けゆくも
合歓の葉に夜更けの螢永く留まる
夏休み『冒険王』といふありき
土用波燈台影を落としけり
乳呑み児の泣くまでひとり夏座敷
朝焼けに翼ばたばた蚊喰鳥
硝子戸と網戸の狭間揚羽生る
乳呑み児を対角線に夏座蒲団
小波の上に無数の水馬
金蛇のそつと隠れる小つつじ
レストラン膝に置きたる夏帽子
夏霞百まで生きるDNA

篠田 純子

木村茂登子

定梶じょう

森 理和

吉成美代子

打たせ湯に夏のひと日の冷えほぐす

涼しさや川から黒き燕の巢

わが家におのが棲む匂ひ梅雨つづく

渡邊 友七

でで虫や林泉の青極はまりぬ

梅雨晴間眉の高さに蝶遊ぶ

駅前の人々の往き来や日の盛

鎌倉喜久恵

川面まで緑をおとす夏柳

くちなわの寝そべってゐる酷暑かな

山里の夏鷺や恣

長崎 桂子

緑陰に家族寛ぐ此処彼処

世界中サッカー熱に梅雨忘る

森山のりこ

蒜の匂ひの強き注射受く

保冷剤首にまきつけ炎天下

芝宮須磨子

外房の漁師の宿の冷瓜

田中 藤穂

雨上りサッカーグラウンド蝉しぐれ

早崎 泰江

プールではなけれど人居ぬ露天風呂

東 亜 未

選を終えて

二三年六月十三日、発見されたのは一週間後です。もとは川幅があつたのかもしれませんが。惨憺たるものだったそうです。

神田川犬も交じりて水遊び

敏子

約一年くらい前、神田川の辺りを吟行した。

川沿いの家は、それぞれに美しい花の咲く木や実の生る蔓を育てていて見飽きなかった。

神田川は水量も少なく、番らしい鴨があそんでいました。石の上に亀が甲羅を干していました、以前、大雨に因る水害のあつたこの辺りは、予め雨水を溜めておく治水工事を行ったため、本当に犬も水遊びができそうなおだやかな町の川になっていました。

腰窓にへばりつきたる鼯馬

恭子

通風や採光のために、部屋や廊下の床に接して設けた小さい窓。腰の高さのあたりに作られたので「腰窓」と言う。ベンジヨコオロギとも云いますが蟋蟀

ボート漕ぐ池にブラックバスの影

敏子

「ブラックバス」北米産サンフィッシュ科の淡水魚だそうです。亡くなった開高健が元気で大物を釣っていた頃、氏の書いた本で読んだ気がします。釣好きの人が外国で釣っても検疫で持帰ることができないうので、珍しい魚を買って大きくなると持て余し、川に放すそうです。多摩川の係の人が言っていました。小さい魚はみな大物の餌になっているそうです。

木下閼玉川上水覗きけり

敏子

友人と通りかかった草の茂った小川。だざいおさむがT・Yという女性と多摩川に入水したのは昭和

と混同されていたのは翅がないため鳴けないからです。長い脚を拾ったことがあります。茶色できれいでした。

蜘蛛の囿の宙へとびだす容して

恭子

木の枝から枝に跳んで、円型に作られた蜘蛛の巣が、風をはらんで恰も宙へとび出すかのように見えたのでしよう。面白いです。

忘れぬマッカーサーのサングラス 実

アメリカの軍人。元帥、太平洋戦争開戦時の極東軍司令官。日本降伏後は、連合国軍最高司令官として日本占領に当ったマッカーサー。テレビもなかったのに、筆者もあの光景をはっきり記憶している。最高司令官の軍帽にサングラス。コーンパイプを銜えて、タラップを降りてくる場面である。

後に新聞や雑誌、映画館のニュース映画で観たのかも知れませんが、その場面だけ切取ったように覚

えているのは、よほどの衝撃だったのでしよう。あのサングラスはレイバンだということは、ずっと後で分りました。

一九五一年、米・ソ連を背景に始った朝鮮戦争の処理問題で解任されます。

嫌いです政治の話と金魚玉

実

開口一番、「嫌いです」の感情表現は大胆と思いました。が、「金魚玉」が嫌いなのは小さいガラス鉢に金魚をちまちまと飼うのが趣味に合わないのだとすぐ分つたので、作者を納得させてくれる政治の話だったならその限りではないのかと解つてまいりました。

屋上に炎天がある百貨店

喜孝

多種類の商品を各部門に分けて陳列販売する大経営の総合小売店。デパートと同じです。

“百貨店には何でもあります”がうりですから、

屋上に上があれば「炎天」もあるというのでしょう。「炎天」はいただけませんが、ウィットを買います。

ずっと昔、白木屋という百貨店が火事になって、着物の買物客が多く、上階から飛降りるのを躊躇ったため、洋装を奨励するようになったそうで、一つ話となり、何度きいたかわかりません。

杖持ちて炎天の middle 齒科へ

尚子

齒科・内科・整形外科、いろいろありますね。齒科は日数がかかるかもしれません。事をはじめようとするとき発する感動詞「ござ」。

花生けに挿す小風鈴子の見舞

典子

壁に掛けて好きな花を挿したのしむ花生けでしょう。暑中見舞にいらした娘さんでしょうか、「花生け」に、かわいい風鈴を挿してくれたのですね。羨ましいこと。

小波の上に無数の水馬

美代子

遠目にはキラキラ光る水溜りに見えたので近づく
と、水面いっぱいに「水馬」が長い脚を絡ませんと
ばかりに盛上がったたり滑走したりしている。幾つか
ある歳時記に、関東では「まひまひ」を水澄しと言
い、水馬は「あめんぼう」と言うらしい。アメンボ
科の昆虫は飴に似た匂いがあるそうですが嗅いだこ
とはありません。



回り灯籠少女が蝶を追ひつづけ

星涼し回転木馬波打てり

回視せし昭和の永き秋のこと

正月の徒然に有平棒回る

あを柳集

兼題 回

佐藤喜孝 選

回り灯籠少女が蝶を追ひつづけ

人は幾つになっても少女・少年の心を持続けてゐるやうに思ふ。回り灯籠は走馬灯。影灯籠・舞ひ灯籠とも云ふさうだ。回り灯籠の永遠性と、少女がいつまでも蝶を追ひかけることと面白く絡み合つてゐる。

星涼し 回転木馬波打てり

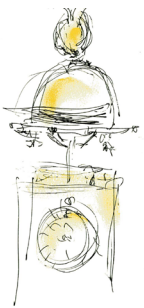
遊園地は夜も営業してゐる。回転木馬は単純な施設ではあるが、夢がある乗り物である。子供の頃、あるいは子供とともに乗つた記憶がうつすらとある。この句の回転木馬は人が乗つてゐない方がよい。星の涼しくまたたく下、ゆつくりと波打つやうに上下しながら回つてゐる木馬を想像すると、この世から隔絶した光景のやうである。

回視せし昭和の永き秋のこと

回視、回想する事物をはつきりと指示してゐない。昭和そのものを「秋」と断じてゐるとも読めるし、昭和の中の一点を指してゐるとも読めるが私は前者として読んだ。昭和を秋と思ふこと、また秋に作者はどのやうなおもひがあるのかは知らない。だが、しつかりと大きく表現できてゐると思ふ。

正月の徒然に有平棒 回る

アルヘイはポルトガル語、砂糖菓子之意。有平棒は床屋の動く看板。私は飴ん棒と云つてゐた。正月といふと華やかな感じがするが、人出は常のごとくではなく、山野は枯れて蕭条としてゐる。徒然は「つれづれ」ではなく「とぜん」と読んだ。この徒然が句の色合を明確にしてゐる。わびしい景である。



題詠 回・回 (順不同)

夏の空へリコプターの旋回す

安部 里子

冷房の回転寿司のランチかな

炎晝の木陰さがして迂回する

ソーダー水回教の人と同席す

竹内 弘子

鼓虫の回るに飽いて歩をかへす

回り灯籠少女が蝶を追ひつづけ

夏草を踏分けてゆく回峰僧

お祭の寄付を集めて回りけり

ゆっくり回る「カサブランカ」の扇風機

回り灯籠昭和の闇の濃かりしよ

田中 藤穂

星涼し回転木馬波打てり

回転てふおろかしき武器敗戦す

回転椅子素足の女医のほえめり

夏料理みなくつろぎて七回忌

回歸性人にもありし酷暑かな

吉弘 恭子

外灯点くふたつ一緒に回覧板

回りて花の根方に辿りつく

回り道すこし遠のくたこ焼や

見つからぬ回数券を買ふ炎暑

回視せし昭和の永き秋のこと

梅雨の明回転ドアの前で父母

日向ぼこ回転椅子をまはし乗り

回雪をもら手をのばし追ふ子かな

長崎 桂子

子の笑ふ回転木馬昼寝覚

供物して回り灯籠盆支度

篠田 純子
堀内 一郎

轟々と因果は回はり滝の口

回り灯籠老婆は山へ還りけり

回想の少年哭くや終戦日

へりコプター回りはじめし終戦日

回転扉ゆつくり閉まり雲の峰

木村茂登子

夕焼くる池泉回遊式庭園

酸漿と谷中しょうがにある回想

巡回の巡查の留守を蝉しぐれ

問診は○×式の回答欄

定梶じょう

回想のバスのたびたび稲架隠り

正月の徒然に有平棒回る

秋高を寂しむ回送タグボート

回帰線台湾の夏至正午かな

夕焼けて巡回動物園の麒麟

九回の裏の西空雁渡る

佐藤 喜孝

蓮の雨七十八回転の針音

梅雨の夜しづかに回る花賣機

ハレー彗星次回は百と三十歳

ときどきは回すものなり白日傘

あを十周年記念俳句会

場所 未定

集合日時 11月13日(土)

「あを」創刊十周年を記念し句会・懇親会を計画しています。お忙しいと存じますが予定に入れて置いてください。

幹事 須賀敏子 森理和 吉成美代子

吟行案内

場所 金沢文庫「仏像のみかた特別展」と

称名寺

集合日時 10月17日(日) 十一時

京浜急行「金沢文庫」駅改札

句会場 称名寺門前「桃華庵」(蕎麦店)

参加希望者は十月七日まで 幹事・佐藤喜孝

090-9828-4244

七月の句会

傳

中野区 カフェ傳

真つ直ぐに思案などせず今年竹 実
石投げてあめんぼ散らず大宰の忌 弘子
男梅雨つかこうへいの死去の報 綾子
齒応への胡瓜ぼりぼり投票日 理和
蛸飯の炊き上る香や半夏生 茂登子
夏山に汗すひとられ仁王立ち 文子
見るまいと思へど蛇の尾の長し 敦子
さくらんぼ必ず一粒づつ食べる 寒林
凌霄の花をくぐって投票日 喜久恵
夾竹桃三度三度をいただいて 純子
夏近しゼリーのやうな日を過ごし 恭子
落ちてなほ酸っぱいままの夏蜜柑 敏子
蓮の雨七十八回転の針音 喜孝
甘いとはいへどやっぱり夏蜜柑 尚子
杏ジャム煮てをり雨だれ弾みをり 藤穂
調 逗子吟行

泰江 綾子 敦子

年古りし松屈強な芯の立つ

弘子

あを吟行会

神田川源流

とんぼうの犬の尻尾に触れてどぶ 恭子
川遊び石をもち上げてはのぞき 綾子
川狩や小さき靴を並べ置き 須磨子
人を待つ積乱雲の西に湧き 藤穂
夏草の大きな斜面照り光る 喜孝
川遊び犬も交じって神田川 敏子
小波の上にあまたの水馬 美代子
水かげろふ佇ちて扇を荒使ふ 敦子

七座句会

中野区・小川苑

盆灯籠母のエプロンいつも白 藤穂
毒消しやあいらんかねと素通りす 木枯
山法師雨近ければいよいよ白 喜孝
夏落葉鹹のやうに川およぐ 恭子
蠅叩柱に下げて古りにけり 尚子
楠の風責筋揚羽落ち着かず 綾子
三疊てふ茶席の神氣渾晶 東亜未
大声に時を託して大暑かな 須磨子
思ひ出の扉の外を雲の峰 理和
白南風に宗丹木槿みやびたり 房代

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森理和 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子 (0488-86-3501)

あを吟行会

詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子 (090-9839-3943)

『あを』を読んでくださる方が俳人の他にもをられる。先日そのうちの一人から左記のやうな質問をいただいた。

(省略) 八月号の『山百合の……』の句「がうと開きし向ふ脛」の意とする所は……又「蟻の衝」の道の古字を使った意とする所は、

この頃やっとヒマが出来ましたのでおうかがいする次第 呵々 よろしく

ヒマが出来るとよろしくない考へが浮ぶものである。扨句意は兎も角として、使用する漢字はできうる限り本字(正字・古体字)を使ひたいと思つてゐる。出来うる限りといふのは本をパソコンで自作してゐるのでパソコンで手間が掛らず可能な限りといふ条件付ではある。略字あるひは新字は書く(覚える)手間を省くために作られたものだがパソコン上ではそのやうな気遣いは必要ない。本字は創られた時の意図が見え

てゐて形が美しい。漢字が只の記号と化するのは何ともさびしい。と云ふことで奇を衒つてゐる訳ではない。あらためて辞書を開いて「道」を調べてみた。「衝」は金文が出自。「道」は篆文が出自で正字は「道」である。道はこの文章を書くにあたり、パソコンにはないので今私が作ったローカルな字。今回調べて「衝」は特殊過ぎ、「道」は拘りすぎと思つた、「道」ではなく毛が一本足りない「道」あたりが穏当な収り処だらうか。有難い質問であつた。

二〇一〇年九月号

発行日 八月十二日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房
カット／恩田秋夫・松村美智子 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130・6・55526(あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。